
姫ヶ谷コトハの心理学方程式

invisiblehand

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

姫ヶ谷コトハの心理学方程式

【ZPDF】

Z0021W

【作者名】

invisiblerehand

【あらすじ】

絶対に読まないでください。

序章

絶対に読まないでください。

例えば、冒頭にこう書かれているとする。

でも、『読むな』と書かれたりするとかえって読みたくなる。日本民話の『鶴の恩返し』や『浦島太郎』の物語の中でも見られる効果で、「絶対に中を覗かないで下さい」と言われたのに覗いてしまつたり、「決して開けてはならない」と言われたのに開けてしまう。この心理を『カリギュラ効果』っていうの。現に今、既にあなたはここまで読んでしまった。

さて、この物語は私、姫ヶ谷コトハと学尾シゲルが、日常で繰り広げる葛藤、心理戦を描いたものです。文頭のご挨拶がお粗末であることを、ここにお詫び申し上げます。つきましては以下、学尾シゲルの視点で本書をお楽しみいただければ幸いです。

> i 2 9 6 1 7 — 3 8 1 0 <

第1話 姫ヶ谷彼氏適正テスト

「またフラれたらしいよ
「また？ これでもう何人目よ？」

四人目。始業式始まって以来これで四人目になる。これは彼女、^{ヒメガヤ}姫ヶ谷コトハがこの二週間でフツた男の数だ。いや、『別れた』とでも言つべきか。彼女は一度告白されると、それを断つた事が無い。一度付き合う事で彼氏として適正かどうかを判断しているらしい。いつしかそれは、正式に付き合うまでの『姫ヶ谷彼氏適正テスト』と呼ばれるようになつていた。そして恐らく五人目の受験者となるであろう男が、今まさにオレの目の前にいた。

オレの名前は学尾^{マナビ}シゲル。^{ササエダ}笠枝高校二年生で、心理学の勉強をしている。にもかかわらず人と付き合いが苦手なのだが、どうやら困っている人を見ると放つておけない性格らしい。そのせいか、よ

く人から相談や頼まれ事をする。言うなれば、オレが心理学を専攻し、『臨床心理士』を目指している所以だ。心の中では『面倒だ』と思つてはいるものの放課後、今教室で本人曰く『心友』の稻芝コウイチくんの恋愛相談に乗つて『いる自分がいた』。

「おいシゲル！　聞いてるか？　シゲルくーん」

「ん？　なんだっけ」

「やつぱりまた考え方かよ。お前そういうの多いよな。頭の中で一人称小説のナレーションでもしてるつもりか？」

そんなワケないだろう。オレはよくこうやって一人、考え方をしては自問自答を繰り返すという癖がついてしまつて『いるだけ』なのだから。しかしどうだろうか。もし第三者視点からオレの心を読んだのであれば、まるでコウイチの言つ小説に見えなくはないのかもしない。

「でもお前は主人公つて柄じゃないな。今度の事で主人公は俺、ヒロインに姫ヶ谷つてなるだろう」

自称心友のコウイチが勝ち誇つたかのように言つた。

「はいはいそれで、オレにどうしろと？」。オレは机に肘を付いてコウイチに問い合わせる。

「今度、姫ヶ谷彼氏適正テストを受験しようと思つ」

つまり、彼は『姫ヶ谷に告白をしようと思つ』と言つて『いる』わけなのだが。

「そこで、主人公の俺としては失敗できないのである！」

「じゃあ脇役のオレは告白するお前を見守つていればいいんだな」違う違う、それじゃあ何のためにお前は心理学を勉強しているんだよ

『お前のためじゃない』と言つ事だけは自信を持つて言えるが、

心の中で彼にそつそつ『コミ』を入れている自分にも一つそつ『コミ』を入れたいというのが本音だ。

「……つて言うかお前も心理学専攻だろうが」

「そう、恋愛とはつまり心の駆け引き、心理戦、タイミングが命なんだ。そこでお前に一つ頼みがある」

そりきた。相談から頼み事へのナチュラルシフト。

「……俺が告白する前に、お前試しに告白してみてくれないか？」

「はあ？」

そんな滅茶苦茶な頼みがあるか。

「的^{テキ}を知り己を知れば百戦危うからずって聞いたことあるだろ？」「まあこの場合、『敵』が『的』になる方が意味が通るが。続けて口ウイチは口を開いた。「シゲル、お前が先に彼女に接近することで、この恋愛必勝への方程式を築き上げる」

つまり、彼は『オレを捨て駒にして情報を集め、姫ヶ谷の彼氏になる』と言っているワケなのだが。当然、オレは断つた『面倒だ』。

「……それは無理な相談だな」

「じゃあ、せめて姫ヶ谷に関する情報だけでも調べてくれないか？」
。コウイチは空かさずこいつ言ってくる。

オレはしばらく悩んだ結果、不本意ではあるがその頼みを受け入れてしまった。

「それくらいなら」

そらきた。オレの放つておけない性格。

「でも、何でオレなんだ？ このC組なら皆心理学専攻だろ？」

「それはほら、あれだよ……相談事ならシゲルが一番だつて、皆言つてたから」

「

結局、断らざるにその指名を引き受ける事になり、後にオレは五人目の『姫ヶ谷彼氏適正テスト』の受験者となる。もちろん、最初は情報を得るためだけに、彼女に接近するつもりだった。

そしてオレは、願つても無い形で彼女に接近することになる。

第2話 ハウイチの頼み

その日は、HRで委員決めが行われることになった。 その結果。

「では、ジャンケンで負けた学尾くんと姫ヶ谷さんをクラス委員に任命します」

皆の拍手喝采の中でオレは深くため息をついた。『面倒だ』。しかし姫ヶ谷コトハを知るには絶好のポジションではある。そこでオレなりにこの数日間で調べ上げた、姫ヶ谷コトハの考察をまとめてみることにした。

姫ヶ谷コトハ。彼女はオレと同じく笹枝高校心理学専攻の二年C組で、今年初めて同じクラスになつた知的女子。ご存知の通りオレ同様、ジャンケンで負けてクラス委員になつた一人だ。その艶のあるしつとりとした黒髪には一切の癖が無く肩下まで伸びている。女子生徒の中では平均的な身長の持ち主だが、高校二年生にして人並み離れたそのプロポーションは、男女問わず周りの目を引いていた。二週間で四人の男をフツたといつだけはあつて、かなりの美貌の持ち主だが、性格の方はといふ……まだ情報が足りない。やはり噂や客観的視点では得られる情報は限られてくる。ここからは直接話すしか……。

そしてやつてきたこのシチュエーション。その日の放課後、オレと姫ヶ谷コトハはクラス委員の仕事をしていた。二人きり。周りには誰もいない。ハウイチから引き受けた頼み以上の事になるが、なぜかオレの頭の中には最初の頼みである『告白』が過ぎていた。今がチャンスかもしれない。ならばオレが攻略してみせよう。この

『姫ヶ谷彼氏適正テスト』を。唾を呑みオレは口を開いた。

「好きです。僕とつきあってください」

「「めんなさい」

あらう事か、ソッコーでフラれてしまつた。いや、ちょっと待て。大体彼女は断ることをしないはずじゃないのか？一度付き合う事で彼氏として適正かどうかを判断しているんぢゃなかつたのか？それがこの最短記録だ。

「それより、委員の仕事早く終わらせましょ

「ハイ……」

自分で言つてむなしくなるが、オレの返事は大層情けなかつた。しかし何故だ？解せない。それに気まずい。しばらく間を空けて、姫ヶ谷は口を開いた。

「……その言葉、あなたがホントに私を好きになつた時、もう一度聞かせて」

「はあ……え？ どういう事ですか？」

彼女はここで初めて、オレに視線を向けた。

「だつて……あなたは私に恋をしていないでしょ？ 差し当たり、誰かに頼まれて私を探ろうと近づいたといった所かしら」

オレは姫ヶ谷のその言葉に呆気に取られていた。全くのその通りである。オレの告白に気持ちが入つてなかつただけかもしれないが、計画を見破られていた。まるでそう、心を読まれているような感覚だ。オレは彼女に返す言葉も見つからない。しかし、この瞬間から心友コウイチの計画は破綻してしまつた。すまない。

しかし話はここで終わらなかつた。

「ねえ学尾君、そんな第三者さんあなたに聞きたいんだけじ、その人は私のどこが好きなの？」姫ヶ谷はそう言つてシャーペンのノックを下唇に押し当てる。

「それは多分、姫ヶ谷さんが美人だから……かな？」

その答えに彼女はため息をついた。

「それは私の見た目が好きってことなの？」

「いや、きっと性格も……」オレはコウイチを弁護するべく、とつさにそう言つた。

「それはウソね。でなければあなたに探りを入れさせたりしないわすまないコウイチ。次に告白する時はもつとハードル上がってるかもしねえ!」

「皆そうなの。前に私に告白してきた四人も、美人だとか可愛いだとかで私の外見ばかり。話した事もないのに、誰も私の内面を見てくれなかつたわ。少なくとも、あなたとは違つて本気だつたみたいだけど」

一瞬ではあつたが、そこには悲しそうに俯く姫ヶ谷コトハの姿があつた。贅沢な悩みだ。しかし人が第一印象を見た目から入るのは、仕方が無い事じゃないのか？ オレはそう心の中で、彼女に問いかけていた。

「にしても学尾君つてお人よしね。普通ならそんな頼みは引き受けないと思うけど、何で頼まれたの？」

もうここまで来ると、オレは何一つ隠す気がなくなつていた。
「ああ、最初は『試しに、姫ヶ谷に告白してみてくれないか？』って言われて、さすがに断つたんだけど『じゃあせめて、情報だけでも』って言われて……思わず引き受けちまつた」。オレは頭を搔きながら言つ。

「ふーん……」

コトハは意外にも、興味津々な表情でオレの顔を覗きこんでいた。その大きな瞳を直視できず、オレは思わず視線を反らす。

「そ、それで姫ヶ谷に近づいたはいいがなんていうか、頼まれた事以上の仕事をしてやるうと張り切っちゃつたっていうか」

「その結果が今の『告白』つてワケね？」

「まあ、そうなるな」

彼女はしばらく間を空けると視線を下ろし、やがてクラス委員の仕事に戻つた。オレはそんな姫ヶ谷を目で送り、仕事を再開しようとしたその時、彼女は再び口を開いた。

「もし、その依頼人が同じ本校の心理学科の人間なら考えられる事は一つ。あなた、マインドコントロールされてるわよ？」

「マーケティングホールド」とは?

第3話 マインドコントロール

オレは姫ヶ谷に問い合わせた。その問い合わせに答えるように、彼女は語りだす。

「マインドコントロール。それは特定のターゲットに對し言葉や行動を用いて、ある目的へと相手を誘導するのが狙い。ターゲットは無意識のうちに相手の思惑通りに動いてしまうの」

オレは腕を組んで考え込んだ。彼女に言われる事をイメージして回想する。

「いい? 学尾君。その依頼者はまず『私に告白してみて』と言つたんでしょ?」

「ああ、言つた」

「でも当然あなたは、そんな滅茶苦茶な頼みが聞けるわけもなく断つた」

「その通り」

「でもその後に、『せめて私に対する情報だけでも調べてほしい』と言つた」

「まあ、だいたいそんな所かな」

「これは心理学における深層心理を利用した交渉術で『ドア・インザ・フェイステクニック』って言われているの。最初に相手が断るであろう負担の大きな要求をし、断られた所を空かさず本題である比較的簡単な要求をする。頼まれた方には、『一度目の要求を断つてしまつた』という罪悪感が残つており、一度目の要求を簡単に呑んでしまつの」

「あつ……」

オレは思わず声をあげてしまった。コウイチに頼まれていた時の心理は、まさに姫ヶ谷が言つた事そのものだった。

「あいつがそんな事を!?」

「それだけじゃないわ。結果あなたは断つたはずの『告白』をして

きた。依頼人との会話の中で、煽てられたりはしなかつた？

オレは頭の中で依頼人「ウイイチ」との会話を思い出していった。しばらく考へていると、とつさにあの一言を思い出した。

「そういえば、何でオレに頼むか尋ねた所、『相談事ならオレが一番だ』って

「本人がそう言つてたの？」

「いや、他の皆が言つてたらしい」

「なるほどね……。それは第三者を通じて間接的に相手を褒める事で、褒めた相手が意欲的になる『ウインザーフェラ』。結果あなたは断つたはずの『告白』をしてしまった。……そしてその矛先は私も向けられている」

「どういう事だ？」

「ウインザーフェラの重複技とでも言つのかしら。あなたを説得するために使われ、今度はあなたを通じて依頼人の好意が私に伝わる事で、私が依頼人に対しても好印象を持つという事を含めた高等技術ね」

オレは心友の「ウイイチや、今日の前にいる姫ヶ谷コトハの心理、その読みの深さに圧倒され続けた。オレは本当にここに心理学科に来て良かったのだろうか。そう考え込むオレに、気づけばコトハが声をかけ続けていた。

「学尾君、ねえ聞いてる？ こつちは集計終わったけど、そつちはどう？」

「ああ、こつちもあとちょいで終わる」

話は変わるが、我が笠枝高校では学期ごとにクラスマッチが行われている。明日の委員会では、各クラスで持ち寄った競技種目の中から一つに絞ることになつていて。今日はそのためのクラス集計をしていた所だ。

「つてなわけでウチからは票数の多い水泳大会つて事で」
「この結果には感無量だ。コウイチの作戦通り、さすが我がクラス
の男共は分かっている。

「……なんだか腑に落ちないけど、集計結果なら仕方ないわね。明日
一日一年C組は水泳大会で提出するわ」

オレはクラス委員の仕事を終え、一息ついた。姫ヶ谷コトハは帰
るための身支度を整えている。

「なあ姫ヶ谷……今度告白していくヤツがいたら、そいつにチャン
スを与えてやつてくれないか?」

彼女はしばらくオレの方を見ると、やがて口を開いた。

「なるほど。その人があなたに私の調査を依頼した人ってことね」

「あつ、いや……頼む」

「さあ、どうかしら。そんなことよりあなたつて案外、友達思いな
のね」

姫ヶ谷コトハはそう言捨てて、教室を後にする。

「……オレも自分で自分が信じられないよ」

第4話 クラスマッチ競技投票

翌朝、学校に着くやいなやオレは自称心友のコウイチに捕まつた。「で、今度のクラスマッチの競技投票、ウチのクラスは何になつたんだ?」

オレは右手親指を突き立て言つ。

「水泳大会だ」

「つしゃ———！」

と声を上げて喜ぶお前にも今回ばかりは同感だ。

「特にウチのクラスの女子はレベルが高い方だからな」。とは言つものの、まだ全体会議が残つている。

「知つてるとは思うが、まだ決定じやないからな。今日の放課後、クラス委員会が開かれて競技が一つに絞られるから、全体で六クラスある事を考えると……」

「その事なら大丈夫だ。……実はB組とD組にも心友がいてね。そつちにも水泳大会になるように手は打つてある」
なるほど。六組中、三クラスが水泳大会に票を入れれば、ほぼ確実に決まる。コウイチはそういう所だけは徹底しているからな。
しかし、いつも作戦に穴があるのがコウイチだった事を、この時のオレは忘れていた。

その日の放課後、委員会に出る準備をしていくとコウイチが血相を変えてオレの席に走ってきた。

「シゲル！ おい、シゲル！ あいつらしぐじつりやがった」

「ん？ なにが」

「水泳大会だよ。投票日、B組のヤツは風邪で欠席、D組のヤツは忘れてただつて」

「なんだつてえ！？」

「なあ、その場合……選考つてどうやつて決まるんだよ

「他の競技が一票以上あれば、それに決定。一つも被らなかつた場合……」

「被らなかつた場合?」

「六クラス代表、ジャンケンバトル」

「つあ———つ」

と田の前で頭を抱えながら奇声を上げるお前にも、また同感だ。つていうかなんでそんな頼りない『心友』ばかりいるんだお前は。いや、それを肯定してしまえばオレも同類になつてしまつじゃないか。こうなつては勝つしかあるまい。六クラス代表ジャンケンバトルに。

「賭けるしかないな、オレの勝負運に」

「ああ、運に賭けるのはまだいい。だけどお前、どうやつてクラス委員に決まつたのか、まさか忘れたわけじやないよな」

そうだった。オレはそのジャンケンに負けて今ここで委員会の準備をしているんだ。それは相方の姫ヶ谷コトハも同じ事。だったら初めからジャンケンで負けた人をクラス委員になんて決めるなよ。オレとコウイチがそんな話をしていると。

「今の話聞いてると、まるでジャンケンは運任せみたいに聞こえるけど?」

そう言つて話に割つて入つて来たのは姫ヶ谷コトハだった。

「え? そうじやないのか?」

オレは彼女に問い合わせる。その横でコウイチがなにやらモゾモゾしていた。

「コホン、初めまして。俺、シゲルの心友の稻芝コウイチです」。

そう言つてそつと右手を差し出した。

「ああ。あなたが例の」。コトハは腕を組んだまま答える。

「え、例の?」

オレはその会話を妨害すべく話を戻した。

「そ、そんな事より姫ヶ谷。今の言い方だと、ジャンケンは運じやないみたいに聞こえたけど」

「当然でしょ？ ジャンケンは立派な心理戦。あなた、心理学専攻してるわりには何も知らないのね。まあ水泳大会なんて、気分が乗らないから負けでいいんだけど」

「……でもオレが言うのもなんだけど、姫ヶ谷もそのジャンケンで負けて、クラス委員になつたんだろ？ なんと言つか、説得力に欠けるような……」

「あの時はただ面倒だつただけ。勝とうと思えばいつでも勝てたわ」

コトハは自信に満ちた顔で、そう言つて見せた。

「どうだか。後でなら何とでも言えるからな。もしそれが本当なら、今日の六クラス代表ジャンケンバトルに勝つてみせろよ」

すると彼女は少し考へると、ニヤと口角を歪ませて言つた。

「いいわ……見せてあげる。『ジャンケンにおける心理戦』を

第5話 『ジャンケンの女王』 鷹崎マリ

そしてオレと姫ヶ谷コトハは一年C組代表として、委員会が開かれる会議室へと移動した。会場には各クラスから男女一名が参加する。六クラスから二名の学生と、会議を取りまとめる保健・体育の先生二名。計十四名の人間が召集された。

「ではA組から順に競技を発表してください」

やがてA組から順にクラス集計で決まった競技を発表される。他のクラスの競技が被らない事を、オレはただ祈り続けた。そして、各クラスの集計結果は。

A組『野球』

B組『バレー ボール』

C組『水泳大会』

D組『サッカー』

E組『創作ダンス』

F組『バスケットボール』

「以上が今回の候補だ！」

オレの祈りは届いた。あとは六クラス代表ジャンケンバトルを制する事が出来れば、我ら一年C組（男子）の念願である水泳大会に手が届く。しかし、オレはジャンケンで負けたクラス委員になつた弱者だ。必然、『ジャンケンは心理戦だ』と言い放ち、勝とうと思えばいつでも勝てる自信満々のウチのお姫様に任せることになつたのだが、忘れていた。A組には『ジャンケンの女王』と呼ばれる鷹崎マリ^{サキ}がいた事を。

一年A組、クラス委員の鷹崎マリは一年の一学期は委員会に出なかつたものの、一学期三学期ともクラス代表ジャンケンバトルに参加し、見事に連勝。その他、未だジャンケンで負けた所を見た者がいないという逸話の持ち主だ。ということは今学期は野球か、あまり得意ではないな。オレはC組の勝利を諦めていた。そんなオレの

様子を見兼ねてか、姫ヶ谷コトハはオレに尋ねてきた。

「学尾君……この六クラス代表ジャンケン、私に勝つてほしい?」

「それはもちろん、勝つてほしいけど……相手が悪すぎると

「それはA組の鷹崎さんの事?」

「ああ、お前も知ってるだろ? 確かに彼女を見ていると、ジャンケンは運だけではないような気がするよ」

「確かに、鷹崎さんはジャンケンに関して類まれなる才能を持つているわ。でも彼女のそれは心理戦ではない」

オレは彼女の説明を頭の中で整理していた。オレが思っていたジャンケンは運勝負。姫ヶ谷コトハの言つジャンケンは心理戦で、ならば『ジャンケンの女王』、鷹崎マリのジャンケンはいつたい何だというのか。

「彼女のそれは……そうね、『不敗ジャンケン』とでも言つのかしら」

「不敗ジャンケン?」

「知ってる? 学尾君。ジャンケンっていってるのは確実に読める手が一手でもあれば『負けない』の

「確実に読める手?」

「ええ、でも基本その一手を読むのが難しい。グー・チョキ・パーのうち、普通なら勝ち・負け・引き分けの確率はそれぞれ1／3なんだけど、そのうち相手の出す手が一つでも読めるとしたらその確率は変わってくる」

「でも、どうやって読むんだよ?」

「本来なら相手の出し手なんてそう簡単に読めるもんじゃないわ。ただ一つの例外を除いては……。それはグーよ。ジャンケンにおいてグーだけが最初はニュートラルであるがゆえに、そのシリエットに大きな変化はない。でもチョキかパーを出したならその形は大きく変化してくる。そこを見極めるの。グーかそうでないか。そうなると必然的に、相手の手に変化がなければパーを、そうでなければチョキをだせば負けはないわ」

「パーがチヨキな……それにしたって難しいんじゃないかな?」

「ええ、実際私には出来ないわ。でもこれも鍛え方次第では……」

そう言つと彼女は顔の前で小さく右手「じぶしを作つた。

「『後出しジャンケン』」

「え?」

「いくらジャンケンの弱い学尾君でも、これなら勝てるでしょ?」「それはまあ」

「検証してみましょう」

オレは姫ヶ谷に言われた通り、ワンテンポ遅れて手を出した。

「ジャンケンポン、ポン」

当然、オレは姫ヶ谷に勝つ。むしろ『後出しジャンケン』で負けろと言われた方が難しいだろうが。

「学尾くん、今『後出しジャンケン』で負けると言われた方が難しいつて思つたでしょ?」

オレは姫ヶ谷のこの言葉に鳥肌が立つた。

「おま……! やつぱり人の心が読めるのか?」

「そんなワケないでしょ! ……コホン。これはいたつて『普通』の事なの。この十数年間生きてきた私達にとつては、ジャンケンで『勝ちたい』と思うのが普通。その潜在意識が『後出し』でも働いているが故に、負ける事が方が難しい。それを人に気づかれないよう極限まで極めたのが『ジャンケンの女王』鷹崎マリ。恐らく彼女は反射神経に近いレベルでグーに対してのみ、パーを出している「なるほどな……そしてそれが鷹崎マリ、ジャンケン必勝の秘密」

「御名答」

「でも、それじゃオレたちが勝つことなんて無理じゃないか。しかも今回の場合、六人同時でジャンケンするわけだから、その他の四人はどう攻略するつもりだ? まさか五人相手に心理戦で勝つといつのか?」

オレはそんな事出来るはずがないという意味合いを込めて、姫ヶ谷に言つた。

「ここからは実戦を交えて見せてあげるわ。私の心理学方程式を」
そう言つと、姫ヶ谷はその『六クラス代表ジャンケンバトル』の
ステージへと足を運んだ。

「いい？ 学尾君。これにおいては『ジャンケンの女王』、鷹崎マリが使えるの。彼女のルールは団体でも個人でも変わらない。彼女は、視界にグーを捕らえたらパーを出せばいい。仮に他の誰かがチョキを出してもあいこになるからね。逆に視界にグーが映らない場合、彼女は必ずチョキを出すわ。この時、鷹崎マリ意外の五人は『負け』か、『あいこ』になる。つまりこの団体ジャンケン、必勝の鍵は負けの無い チョキ。私は鷹崎マリのおかげで、負けることはないの」

姫ヶ谷はそう言つと、集計用紙のカットに使つた手元にあるハサミを掲げた。

「なるほど……それでの団体戦は切り抜けられたんだな」。後日談である。そう、そしてここからが本番だった。一対一。事実上、『心理学方程式』姫ヶ谷コトハ対『ジャンケンの女王』鷹崎マリ。心理戦対不敗戦である。

「そして私の作戦は彼女の虚^{キモ}を突くことにあつた。それ以外に勝つ方法がないからね」

コトハの言う通り、このルールを守る鷹崎マリに負ける理由はない。

オレはその時の勝負を思い出す。

六人でのジャンケンを勝ち抜いた姫ヶ谷コトハと鷹崎マリはステージに残つて睨み合つていた。

「お手柔らかによろしく。一年C組、姫ヶ谷コトハさん

「よろしく。『ジャンケンの女王』鷹崎マリさん」

「あら、私の事知つているのね？ 光栄だわ。そうそう、私もあなたの事知つてるわよ。何でも、ジャンケンに負けてクラス委員になつたとか」

鷹崎のその言葉に、周りの観衆がクスクス笑っていた。

対する姫ヶ谷コトハは鷹崎マリに言つ。

「そうね、鷹崎さん。でもそんな私に負けたら、あなたも大恥ね」「残念ながら負ける自信がないわ」鷹崎は表情はその言葉通り、自信に満ち溢れていた。そんな鷹崎マリに對して、姫ヶ谷コトハはこつと言つた。

「ちなみに私はね、『グー』は出さないわ」

その瞬間、姫ヶ谷の言葉が、鷹崎マリの頭の中を駆け巡った。『グーは出さない？ まさかこの女、私にグーが読めることに気が付いているの？』

鷹崎の中で思い返される六人でのジャンケン。『 そういうえば先の戦いで、姫ヶ谷コトハが見せたあの手。勝った時も、あいこになつた時も、チョキしか出していなかつた。……つまりこれは、私の必勝法に気が付いてやつっていた事？ 彼女が生き残つたのは偶然ではなく必然！？ となると、彼女が次に出す手は……負けの無いチョキ。よつて私は、グーを出せば勝てる……』。鷹崎はそう考えた。

対するは「トハの心理。

『鷹崎マリ、あなたは今の一言で葛藤するだろ。先の戦いからすでに伏線は張つておいた。つまり今頃あなたは、あなたの必勝法を気が付かれたと考える。となると私が次に出す手は負けの無いチョキと考え、彼女はグーを出してくる。よつて私の出すべき手はパー……』

しかし葛藤の最中、鷹崎マリが視線を戻した時、姫ヶ谷コトハの鋭い視線に気づいた。姫ヶ谷コトハは持つていったシャープペンシルの端を軽く銜え、じつと鷹崎マリを觀察していた。

『 いや！ 違う。この女、私にグーを出させるために、わざとあんなことを！？ つまり、彼女の次の手はグーに勝てるパー。よつて私の出すべき手はチョキ。チョキを出せば勝てる』

この時、鷹崎マリは笑いを堪えていた。

『ふふつ……読んでやつた。読んでやつたわよ、姫ヶ谷コトハ。あなたの方を』

一人はこぶしを前に突き出すと、『ジャンケンポン』の図で手を出し合つた。それはほんの刹那の出来事。

しかし、まさにこの瞬間、鷹崎マリは姫ヶ谷コトハの仕掛けた『心理の罠』にかかっていた。

勝負の結果、鷹崎マリのチョキに対し、姫ヶ谷コトハはグーを出し勝つっていた。オレ達、一年C組の勝利である。

「……な、なんで」

鷹崎マリは目の前の出来事を受け入れられなかつた。そんな彼女に、姫ヶ谷コトハは語りかける。

「あなたの敗因は、チョキを出すと硬く心に決めてしまつた事。あなたのがーに対するパーも、反射神経に近いレベルとはいえ、硬い意志の上では成立しない。でももし、あなたが不敗ジャンケンのルールを破らなければ、私に勝ち田はなかつたわ」

姫ヶ谷のその言葉に鷹崎はうつむいていた。

「そうか……いつも通り戦つていれば負けなかつたんだ。でもあなたの『あの一言』に惑わされ、考えてしまつた。それが敗因ね。完全に私の負けだわ」

「ジャンケンの才能はあるにある。でも、心理戦じゃ負けないわ」

そう言つと姫ヶ谷はステージを下りた。

第7話 望ましき傍観者達

姫ヶ谷コトハが見せたジャンケンにおける心理戦。オレはそれを、しかとこの目で見届けさせてもらつた。念願叶つて今年のクラスマツチは、C組（男子）が望む水泳大会に決定する。しかし意外だつたのは姫ヶ谷コトハが乗り気だつた事だ。最初のクラス集計では水泳大会なんて、とてもやりたそうに見えなかつたが、六クラス代表ジャンケンでは積極的に協力してくれた。その数日後、オレは掃除の時間にその事をさりげなく姫ヶ谷に尋ねた事があつた。

「そりいえば何での時、水泳大会乗り気になつたんだよ？」

「ん？ なにが？」

「だから、クラスでの統計結果ではあからさまに嫌な顔してたけど、結果協力してくれたじゃん。あの時、意図的に勝つ事が出来たなら、負ける事だつて出来たんじゃないか？」

オレは彼女にそう尋ねた。

「そうね……私もあの時は何でかわからんないけど、協力しちやつた。今思えば、あなたに上手くしてやられたつて気もするけど」

「オレ何かしたか？」

「いや……何も。そんな事より次はあなた達にがんばつてもらわないとね。今度の水泳大会、ウチのクラス二十七人から男女それぞれ代表を四名、計八名を立ててメドレー、リレーだからね」

「オレ達つて、女子は頑張んないのか？」

「女子は水泳のレベル高いから大丈夫なんですよ？」

オレは姫ヶ谷のその言葉を聞いて一時沈黙。なぜオレに対して疑問文？ 空かさず問い合わせた。

「そうなのか？」

「え？ あなた達いつか『ウチのクラスの女子はレベルが高い方だからな』って言つてなかつたっけ？」

それは確か、オレとコウイチのあの時の会話の一文だ。まさか姫

ケ谷が聞いていたとは思わなかつた。しかもそれはあらぬ方向性で誤解を招いている。オレ達（男子）の言う女子のレベルの高さは決して『水泳』における『競技』の事ではない。あえてここでは口にしないが、その平均を上げているのは今日の前にいるあんたでもあるワケなのだ。

さらに数日後、HRで競技種目に出て人を決める事になつた。その中で誰か候補者を決めるのだが。

「誰か立候補、または推薦はありませんか？」

三度目。HR始まつて以来これで三度目になる。これはクラス委員、姫ヶ谷コトハがこの組の皆に尋ねた回数だ。つまり誰一人として挙手しないのだ。姫ヶ谷は小声でオレに話しかけてきた。

「ちょっとどういう事よ！　ウチのクラスの希望で水泳大会になつたんはずでしょ？　なのになんで誰も立候補しないのよ？」

当然だ。この水泳大会、オレ達にとって勝敗はどうでもいいのだ。ただ傍観者である事が一番望ましいと言える。この様子じゃ、女子の中にも水泳が得意という人物はいよいよだ。この場合、極力目立たないようにするのが賢い選択だ。一年次から引き続くウチの担任の性格からして、目立つと勝手に推薦されてしまう事を皆分かっている。つまりこの現状、クラス全体を見渡す限り皆同等に目立つてはいけない。ただ、前に出て司会進行を勤めるオレと姫ヶ谷を除いては。

「じゃあ、仕方ないから先生が決めるぞー。まずはクラス委員の学尾と姫ヶ谷の二人と……」

案の定推薦されてしまつた。隣で姫ヶ谷がビクッと反応しているのが分かる。しかし先生のこの言葉で状況が一変した。コウイチを筆頭に男子の立候補が増えたのだ。その数たるもの、代表者数の枠を超えてる。っていうかカナヅチまでいる。オレはそれに並つて担任に提案しようとした。

「先生、男子の立候補者も枠を超えたようですし、僕は辞退しま...」

時を同じくしてオレの左足に激痛が走る。なんだろうかこの痛みは。そしてすぐにその状況を把握する。姫ヶ谷がオレの左足のつま先を上履きのとかかとでグリグリ踏みねじっていた。まるで一人だけ逃げ出すのを『卑怯だ』と言わんばかりにグリグリと。

「……やっぱりオレも出ます」

オレに選択の余地はなかつた。

第8話 選ばれし代表メンバー

間もなく代表メンバーが決められる。男子はオレ（確定）と、立候補者によるジャンケンで勝つた者三名。対する女子は姫ヶ谷（確定）と、ジャンケンで負けた者から三名の男女合計八名が選出された。なんだろうかこの男子と女子の価値観の違いは。しかしこのメンバー、ただ純粹に水泳大会における『勝ち』を狙っているヤツがいるかどうかも怪しい。水泳大会までの残り一週間、腕試しを兼ねて放課後、特訓をする事になった。

「水泳なんて久しぶりだな」

メンバーの一人、コウイチがプールサイドで準備体操をしながら言つ。

「……お前、ジャンケン勝つたのな」

オレは鼻から溜息を吐くように言った。そしてまさかのこのメンバー。オレの知る限りろくに泳げるヤツなんて誰一人としていな気がする。っていうか何でいるカナヅチ。

しばらくして女性陣の方々が姿を見せる。彼女達は水着の上にTシャツ（警戒？）姿で、しかしそれでいて期待を裏切らないプロポーションだ。さすがにC組の女子はレベルが高いとは言われるが、その中に最も期待していた姫ヶ谷の姿が見当たらない。

「あれ？ 姫ヶ谷さんは？」

コウイチがそう尋ねると、少し遅れて姫ヶ谷コトハが現れた。彼女は水着の上から薄手のパーカーを着ており、これまた見事なボディーラインを絵描いていた。その姿を前にコウイチが数秒間見惚れ、フリーズしていたのが分かる。やがて彼女が持つ右手に皆の視線が集まつた。

「姫ヶ谷さん、それは……拡声器？」

とつさに口をついて出る。

「うん。さつき先生に借りてきたの。やるからには厳しくいかない
とね」

「え？　姫ヶ谷さんは監督さんでいらっしゃいましたか」

オレがそう言つと、姫ヶ谷は拡声器を口に当たた。

「じゃあまず、一人ずつタイムを計らせてもらうわ。じゃあ学尾君
から」。

そしてオレ達は、姫ヶ谷に言われるがまま一人ずつタイムアタッ
クをしたのだが、以外にもオレを含め平均的なタイムであることに
安堵した。ただし、一人力ナヅチを除いては。

「じゃあ、まず水面に顔を付けてみよつかカナヅジ」

「カナヅチじゃない！　金辻だ！」

「いや、カナヅジって言つたろ？　お前被害妄想者かよつ！」。ち
なみに彼の本名はカナヅジキヨウスケ金辻京介である。

と、こんな具合に金辻の水泳特訓が始まった。

当初はオレも諦め気味だつたが、特訓を始めて数日後、金辻は水
面に顔を付け手を引いてもらいながらであれば、前に進む事が出来
るようになつっていた。金辻がやる気になつたのは、コウイチの『あ
の一言』がきっかけであろう。確かあれば、特訓が始まつて数十分
後の事だつた。

「どうせ俺なんか無理だよ。一生カナヅチでいい」

悲観的になる金辻に対してもオレは人並みながらに、しかし一生懸
命に水泳のレクチャーをしていた。そんなオレと金辻のもとへとコ
ウイチが近寄つてくる。金辻の肩に腕をかけるとこう言つた。

「なあカナヅチ、姫ヶ谷がお前の事、じつと見てるぞ」

「カナヅジじゃな……え？」

オレと金辻は思わず姫ヶ谷の姿を探した。驚く事に、姫ヶ谷コト

ハはの視線はじつとこちらを見つめている。いつか見た事があるようあの視線。そう、『ジャンケンの女王』鷹崎との勝負で見せた時の観察眼だ。姫ヶ谷コトハのあの視線は、何かを真剣に考えている時だ（以後、勝手ながら『姫ヶ谷コトハの観察眼』と名付けることにした）。その熱い眼差しを前に、金辻はやる気を出した。

第9話 放課後の雨やみ

水泳大会まであと五日。昼休みになると、オレとコウイチは屋上に出てコンビニのパンを食べながら話をしていた。

「あのカナヅチだった金辻が、もう一人でも十メートルも泳げるようになつたな。多分コウイチのあの一言がきっかけだぜ？」

「お？ 気がついたか。人は誰しも、誰から認められたいと思うものさ。それが惚れた女ならなおのこと。つまり心理学における『承認欲求』だよ」

「コウイチはそう言つてパック入りのコーヒー牛乳に刺したストローの先をこちらに向けると、また口へと持つていく。

姫ヶ谷の事だ。おそらく意図的にあの視線を金辻に送つて、やる気を出させているに違いない。つてことは姫ヶ谷コトハは金辻の気持ちに気づいてやつてている事なのか？ そうだとしたら何と言つかも、あまりいい性格とは思えなくなってきた。男心を踏みにじつている。しかしながら、オレがそうやって他人の事ばかり考えてしまうのも、

『父親譲りの正義感』といった所だらうか。そうしているうちに、ポンリポンリと雨が降ってきた。昼休みも頃合、オレとコウイチは教室へと戻る。

間もなくして教室の窓からの風景は大きく変化する。外は予報外れの豪雨と共に雷が鳴り響いていた。その位置からでも見えるプールの水面には物凄い勢いで無数とも思える波紋を作つている。

『これじゃ今日の放課後は練習できないな』

姫ヶ谷もまた、外を眺めていた。その表情は、あの時の『観察眼』のそれとは違い、何も考えていないうようなボーッとした虚ろなものだ。

やがてオレはもう一つの問題点に気が付いた。案の定放課後まで降り続いた豪雨で、今日の水泳特訓は中止したのだが、傘を持ってきていない。

「しまつた」

一度玄関には来て見たものの、その雨脚は留まる所を知らず、それどころかより強くなってきたようにも思える。進む事を許されないオレの足は、再び教室へと運ばれた。そしてそんな間抜けな人間はオレ以外にいなかつたようだ。普段ならまだ夕暮れ時だが、この日だけは空を覆う黒雲がその光を遮つており、辺りは暗い。オレは手探りで教室の灯りを点けた。誰もいない教室にただ一人、『置き傘が一本でもあれば』というオレの淡い期待は見事に裏切られ、特別何をする目的もなく席に着いた。

「さて、どうしたもんかな……」

当ても無く鞄の中から偶然手に取つたノートには、オレが纏めた『姫ヶ谷コトハの考察』が記されている。そのノートをパラパラと捲ると、空白だった『性格』の欄に田を留めた。そこに軽い気持ちでこう書き記す。

『性格・あまり良くない』

それを確認したオレは、自ら軽く鼻で笑う。そうしているうちにあるモノが視界の隅に入つってきた。教室に入った時には気づかなかつたが、誰のものだろうか、鞄がまだ机の横に掛かっている。

『あの席は確か……』

姫ヶ谷の席だ。まだ学校に残つているのだろうか、本人の姿は確認できない。

オレはふと外を眺めた。透明な窓の向こうに降りしきる雨は、まだ止みそうに無い。その窓ガラスにポツポツと弾かれる雨粒が、外の世界をぼかしていく。

しばらく眺めていると、プールサイドの一角に動く影を確認した。最初は『気のせい』とも思つたが、再び現れたシルエットと、教室に残された鞄という条件の下、軽く結露しモザイクがかつた窓越しにさえ、それが誰かを察する事ができた。

『姫ヶ谷……』

彼女は一人、学校指定の水着姿。これから泳ぐつもりでも書つのだ
ろつか、この雨の中で準備運動をしていた。

「何してるんだ？ こんな雨の中で」

オレは無意識に、その曇りがかったガラスを手のひらで拭つた。
それでもよく見えない姫ヶ谷の姿を、より鮮明に確かめようと、窓
を開ける。少しばかり降りかかる雨は気にならない。やがて雨音を
かき消すように、水を撥ねる音が聞こえた。姫ヶ谷がプールに飛び
込む音だ（ただし足から）。その情景にはどういう訳か、新鮮味が
あつた。それもそのはず、オレは今までに彼女が泳いでいる所を見
た事が無かつたからだ。『トハが泳ぎだすのを確めるべくしばらく
見学していたのだが、プールに入るつた彼女はそこからまた一向に
動こうとしなかつた。

『……どうかしたのだろうか』

第10話 放課後のプール

やがてゆっくりと動き出すものの、その不自然さからさすがに察する事ができた。彼女、姫ヶ谷コトハは、泳げなかつた。

見たところ水面に顔を付ける事は出来るようだが、いくらバタ足をしても前に進むことなく沈んでゆくその姿は、ある意味夕日よりも鮮やかだつた。なんてことを考えていた。

「つて、泳げなかつたのかよ」

考えてみれば水泳の特訓初日も、姫ヶ谷だけタイムを計つていなかつた。その裏にはこんな理由があつたとは。今思えば力ナツジを見ていたあの觀察眼も、どうすれば泳げるようになるのかを自分なりに研究していたのかもしぬれ。そう考えているうちに、沈んだ姫ヶ谷が浮いてこない事に気づく。『潜水でもしているのだろうか』、という考えが一瞬浮かびはしたものの、状況が事の深刻さを説明していた。

「おい、姫ヶ谷！」

彼女は本氣で溺れていた。『気がつけばオレは既に教室を抜け、プールサイドまでダッシュ』している。

「姫ヶ谷！ おい、姫ヶ谷コトハ！ くそつ！」

制服を着たままプールに飛び込む。もはや考えるよりも先に体が動いていた。やや水嵩がましたプールの水は、いつもより重たく感じる。ぼやけた視界で姫ヶ谷を捕らえると、その手を取り強く引き寄せた。自分よりも先に水面上に彼女を押し出す。

「ゲホゲホッ！ はあはあ……」

「おい姫ヶ谷っ！ 深呼吸だ、深呼吸しろ」

プールの浮力を受けている事を視野に入れて、小柄で華奢な姫ヶ谷の体は思つていていたよりも軽かつた。そのままプールサイドまで引き上げる。溺れてからすぐに引き上げた事が幸いし、意識はあるようだ。

「おい、大丈夫か?」

「…………」

姫ヶ谷は蹲ると、しばらくその呼吸を整えていた。

「お前なあ、泳げないなら最初からそう言えよ。心配しただろ?」

「…………」

姫ヶ谷は沈黙を続ける。オレは蹲る彼女に目線の高さに合わせると、両肩に手を置きその顔を覗きこんだ。黒髪からつうと滴れ落ちる零は、雨水かプールの水だろう。その隙間から窺える表情より、頬をなぞるようになぞらは、きつとそのどちらでもなかつたように思う。オレはただそこに立ち尽くした。

「……今日はもう帰る?」

そう言つて、ベンチの上に置いてあつたタオルを姫ヶ谷の肩にかけ、女子更衣室の前まで送つた。オレはびしょびしょになつた制服を絞り、ズボンの裾を捲くり上げ、教室まで移動するとジャージに着替える。幸い今日の放課後、水泳特訓で使う予定だつたタオルを持つてきていた。

やがて制服に着替えた姫ヶ谷が、口元をタオルで押さえたまま教室へと戻つて来た。

「…………ゴメンなさい」

それが彼女の第一声だつた。

「大丈夫か」と尋ねるオレに、姫ヶ谷コトハは黙つて頷いた。いつも勝気な彼女がこんなに弱々しい一面を見たのは初めてで、オレは少し戸惑つていた。

「今日はもう帰つて休んだ方がいい。一人で帰れそうかい?」

「うん、ありがとう」

姫ヶ谷はそう言つて教室を後にする。

「よし、オレも帰るかな」

彼女の後を追うような形で、玄関まで下りてきたオレは一つの問題点を思い出した。

『しまつた』　傘を持ってきてないんだつた。玄関で立ち往生す

るオレを横目に、姫ヶ谷コトハは折りたたみ傘を広げると、じつ
ぶやいた。

「……入っていく？」

『約束をした』

オレは何とか家にたどり着く。玄関の明かりを点け、親父の靴がない所を見ると、まだ帰っていしないようだ。オレの右手には、持ち手の部分に猫の肉球のデザインが施された文物の折り畳み傘。この日は結局、姫ヶ谷を家まで送り、傘をそのまま借りてきてしまった。世間が言う所の『相合傘』だが、コウイチに見られていたら殺されていた所だ。

『でも約束をした』

姫ヶ谷が泳げないという事を唯一知つてしまつたオレは、放課後の後さうに姫ヶ谷に泳ぎ方を教える事を約束をしてしまつた。オレはそのまま一階の自分の部屋へと足を運ぶ。明日返すのを忘れないように、折りたたみ傘を鞄に忍ばせた（親父には見られたくない）。その時、鞄を開けて一番上にあつた『姫ヶ谷コトハの考察』ノートが目に付いた。オレはそのノートを開くと性格の所に記した『性格：あまり良くない』の横にこつ書き足した。

『性格：あまり良くない、が、やさしい一面を持つ』

続けて

『泳ぎが苦手』

一息ついた所で気が抜けたのか、急に眠気が襲つてきた。今日はなんだかすごく疲れた気がする。オレはそのままの姿でベッドに倒れこんだ。

寒気がする。目を覚ました時とつぜにそつ思つた。夏だというのにこの寒氣はなんだろうか。オレの部屋にエアコンは無いはずだが、微かに部屋のカーテンが揺れているのに気が付いた。

『開けつ放しだつたか』

現時刻は夜九時を回つている。帰つてきてから約一時間、明かりを点けたまま眠つていたようだ。寝ぼけた頭でその少し開いていた窓を閉めるが、気が付けば酷く汗を搔いていた。やがて頭痛に襲われる。寒氣と汗、それにこの頭痛。どうやらオレは、風邪を引いてしまつたのかもしれない。『ああ、やつちまつた』。フラフラの意識の中で、体温計を取りに一階まで下りると、テレビの音が聞こえてきた。どうやら親父がかえつてきたらしい。

「親父」

「おお！ シゲル、ただいま。晩飯買つて來たぞ」

そう言つてオレの親父、学尾ノボルはコンビニの弁当を指差した。いつもの事だ。我が家『学尾家』にはオレと親父、男だけの二人暮らし。母親はオレが物心つく前に亡くなつたらしい。だから顔も覚えていない。小学生の頃、一度だけ写真を見せてもらつた事があつたが、それももう昔の話だ。親父は警察官をしながら、一人息子のオレをこの十数年間、一人で育ててくれた。本人には言えないが、優しくも厳格な父を、オレは尊敬していた。

「おかれり親父……今日はなんかもう、いいや

「お前大丈夫か？ 具合悪そうだけど」

オレは引き出しの中にある体温計を取り出し、熱を測る。

「……38・7、さいあく

「まざいな、薬飲んで寝てる」

熱があると知つたら余計苦しくなつた氣がする。オレはコップに水を注ぎ、薬を飲んだ。苦味さえ感じないほどに味覚まで麻痺しているようだつた。親父はオレの手を肩に回すと、部屋まで連れて行

く。

「何か欲しいものはあるか?」

「.....」

親父はオレを寝かせると、電気を消しゅうべつとそのドアを閉めた。

第12話 お見舞い

翌朝、オレは香ばしい匂いで目を覚ます。珍しく親父が手料理を振い、オレの部屋まで運びにきていた。とはいっても、目玉焼きにベーコン、トーストという有り合わせの簡単な物だが、オレは昔からその組み合わせが大好きだった。昨晩何も食べなかつた事もあって腹も減っている。

「体調はどうだシゲル。少しばは食つとけよ」

「ああ……」

朝食を済ませ、薬を飲む。昨日ほど頭痛は酷くないものの、オレは今日一日、学校を休む事にした。

親父は仕事へと向かい、オレはそのまま自分の部屋で横になつていた。昨日とは打つて変わって外は晴れている。窓を閉めていても蝉の声が聞こえていた。この部屋で、唯一暑さを凌げる物といえば扇風機くらいで、オレはその風で我が身を冷ましていた。

『みんな今頃どうしているだらうか』

昨日の事もあつてか、姫ヶ谷の事が頭に浮かんだ。

普段、早起きして学校に行くのも億劫だと思つていたが、行かないなら行かないで、なんかもどかしい。そんな一日もあつという間で、日も沈みかけ空を赤く染めていた。さすがに寝すぎて眠れないオレは、リビングでテレビを見ていた。だいぶ体調も良くなつてしまつた。ただ、喉の渴きに絶えられず、偶然にも席を立つた時に玄関のチャイムが鳴つた。

「はーい」

オレは玄関でサンダルを履き、鍵を開けるとドアの隙間から来客の顔を確認する。

「ちいす！ シゲル。 お前風邪だつてな」

「なんだコウイチか」

「なんだとは失礼だな！ 『心友』のコウイチくんだぞ？」

「まあ、上がれよ」

オレはコウイチを招き入れると、そのドアを再び閉める。その音に気づいたコウイチが振り向いた。

「あれ？」

「ん？ どうした」

「コウイチは閉ざしたドアを再び開けると、顔を外に出しては『何か』に手招きをした。

「他に誰かいるのか？」

そのドアの隙間からスッと顔を出したのは、申し訳なさそうな表情をした姫ヶ谷コトハだった。彼女はまだ視線を反らしている。

「ああ、姫ヶ谷か」

「……お見舞いに来ました」

「ああ、わざわざありがとう（なぜ敬語？）。まあ、上がれよ」

「クリと頷く姫ヶ谷。オレはコウイチと姫ヶ谷をリビングへ招き入れた。

「なんだ、思つたよりも元気そうで安心したよ」

遠慮なくソファーに腰掛け、コウイチはそう言つた。姫ヶ谷はその横でスカートにシワができぬようここと、やや遅れて腰を下ろす。

「お茶でいいか？」

オレは一人に尋ねた。

「すまんね、見舞いに来たのはこっちなのに」

「いいんだよ、だいぶ体調も良くなってきたし」。オレはコウイチに言つ。

ついでつま先腰を下ろしたばかりの姫ヶ谷が、再び立ち上がつた。

「あ、あの、ケーキ買つてきたんだけど、食べる？ お茶も私が入れるから学尾くんは休んでてよ」

彼女はそう言つとキッチンに立つた。オレと親父、男だけの一人暮らしのこの部屋はいつもならば散らかっている。しかし幸いにも先日、ひと月に一度の大掃除があつたばかりで、部屋は案外片付いていた。キッチンも日頃からコンビに弁当ばかりの『学尾家』にとつ

ては無縁の物で、綺麗さっぱり片付いていた。

「お皿はこれでいい?」

オレは頷く。

「お茶は?」

「冷蔵庫に麦茶が入ってる」

そんな姫ヶ谷の後ろ姿を、オレとコウイチは眺めていた。

「いいもんだな」と、コウイチがつぶやいたが、本人は恐らく口にしたことさえ気づいてないようだ。

「ところで、今日は水泳の特訓は?」

「ああ、他の連中はちゃんとやつてるよ。大会まであと四日だからなあ」

「そうか、オレも明日は学校行けると思つよ(姫ヶ谷をなんとかしないと)」

しかし、思つていたよりも皆マジメに練習している事に驚いていた。残り四日間で、姫ヶ谷コトハを人並み程度に泳げるようにするにはどうすればいいだろうか。そう考えているうちに、姫ヶ谷は人数分のケーキと麦茶をトレーに乗せて運んできた。その慣れた手つきを、無意識に目で追つているうちに彼女は口を開く。

「あつ、そういえば昨日の傘……」

その眼差しは明らかにオレに向けられていた。

「つた――――――つと、このケーキ美味そうだな」

「コウイチの手前、オレは思わず昨日の話をばぐらかした。案の定きよとんとしたコウイチの表情が見受けられる。何の脈絡もなくケーキの話を振つたにもかかわらず、姫ヶ谷コトハは嬉しそうにケーキの話をし始めた。が、申し訳ないけど話の内容は覚えていない。傘はまた後日返す事にするよ。

「泳げなかつた」
「笹枝高校一年のトップアイドル姫ヶ谷コトハ。しかし彼女は

「ゴボボボボボボ

『あつ... しまつた』

今日も放課後の後、姫ヶ谷の特訓に付き合わされていた。きっと傍から見たら羨ましい限りなのだろうが、沈みゆく彼女を前にオレは物事を客観的に捉える余裕といったものがなかつた。オレは彼女の両手を取りを引き上げる。

ん？

もう一度頼む

放さないでよ。」

卷之三

オレは金辻にやられた時のようだ、姫ヶ谷の手を取りハタ足の練習からさせていた。自転車の訓練のそれのように、急に補助手を放してみたのだが水泳ではそう上手くいかないらしい。

「これも駄目が、こりや重症だな」

「わ

「まあまあ」

オレは機嫌を損ねる彼女を、ギリギリの所までからかっていた。 とはいものの、クラスマッチの水泳大会まであと二日。 これは金辻よりもカナヅチかもしれない。

水泳の実力が人並み程度のこのオレが、つい先日まで泳げなかつた女の子を泳げるようにするなんてミラクルは漫画や小説の中のお話……でもあり得るはずもなく、オレたちC組はあつという間に大

会迎えることになった。

* * * * *

さあて、どうしたもんか。この時のオレは既に、C組の勝利よりも姫ヶ谷が恥をかかなくて済む方法を考えていた。オレ自身は泳げない事を恥とは思っていない（というか誰でも最初は泳げないだろう）が、放課後の雨の中を一人で練習しようとしていたほどの負けず嫌いの彼女は、そうは思わないだろう。こんな時でも人の悩みは放つておけない。オレの解は『姫ヶ谷が泳がなくて済むショチュエーション』を作る事だった。そんなクラスマッチの開会式での事。

「なあ姫ヶ谷。リレーの順番だけど……」。オレは先頭に立つ彼女に耳打ちをする。

姫ヶ谷にはこのクラスマッチ、リレーの順番の理想を伝えた。幸いクラス委員という立場上、オレ達にはその権原がある。

「いいけど……私が最終競技者？ アンカー 何か策があるの？」
「この際どこに入つても一緒だろ？」

オレは彼女を説得するよつて言つた。姫ヶ谷は平常心を装つてゐるつもりだろうが、その曇つた表情から読み取れる不安感は隠しきれない。

ならば今度はオレが見せてやろうではないか。学尾シゲル、一世一代の大芝居を。

間もなく水泳大会が始まった。各クラスA組からF組までの第一泳者が飛び込み台に足をかける。泳法は自由だ。やがて審判長の銃声^{アイス}と同時に選手が水中へと飛び込むと、観衆の声がこだました。オレはオレの作戦をイメージトレーニングする。オレは7番手。

その引継ぎはアンカーの姫ヶ谷に繋がれるはずなのだが、もとよりそのつもりはない。

オレは姫ヶ谷に繋がない。なぜならオレは『溺れたフリ』をするからだ。恐らくその時点で大会は一時中断。その流れで姫ヶ谷は泳がなくて済むだろう。

大会の中盤。4番手のコウイチあたりまでは六クラス中3位と好成績だった。しかし6番手の金辻辺りから、徐々に他のクラスとの差が開き始め、7番手のオレが引き継ぐ頃には5位まで落ちていた。内心ほつとしていた。本当にいい勝負をしていたら、頑張っているみんなにも悪い。しかし5位なら勝敗にはこだわらないだろう。次はオレだ。手足をブラブラさせ、あたかもやる気があるかのようにストレッチを始める。少し遅れて金辻が壁に手をかけると同時にオレは飛び込んだ。その二十五メートル先の飛び込み台で、アンカーの姫ヶ谷が不安そうにこちらを窺う姿がちらりと見えた。オレはクロールをしながら考えている。

『溺れるフリをするなら中間の十一メートル辺りか?』

次の瞬間、オレの左足に激痛が走った。
なんだろうかこの痛みは。
そしてすぐにその理由を把握する。

つった

『本気で足つった! イテツ!』

オレは溺れるフリをすることなく本当に溺れていた。ストレッチを怠つたのが原因だつた。パニックに陥つた時、大量の水を飲んでしまつた。沈み行くオレは、けして夕日のように鮮やかではないだろう。どんな状況でもオレは泳げると甘く考えていた。次の瞬間、覚えのある柔らかな手の感触がオレの手を引っ張つた。その手が導くがまま、プールサイドまで引き上げられる。

ぼやけたのは視界か意識か。それさえも分からぬ。しかし声だけは鮮明に聞こえた。

「学尾くん！ しつかりして！」

後で知つた。驚く事にオレを助けたのは姫ヶ谷コトハだった。泳げないはずの彼女は、溺れたオレを真っ先に泳いで助けに来たのだ。火事場の馬鹿力とでもいうのだろうか。その時の彼女は珍しく心理の限界を超えて、理性ではなく本能で動いていた。

保健室で横になり、オレは一人考える。

水泳大会で勝つことも、姫ヶ谷を泳がせないようになるとさえ出来ず、恥をかいたのはオレだった。けれど、結果はどうあれ一生忘れられない夏の『始まり』となつた。

今まさに、スタートの銃声^{アイズ}が鳴る。

* * * * * クラスマッチ編・完

高校一年の7月。期末テストの終わり。オレたち一年C組の教室に新鮮な空気が流れ込んだ。淀んでいた空気は一新され、後方の席に座るオレにとつては皆、孵化したばかりの雛鳥のように、まるで伸ばした羽が見えるようにさえ思えた。きっとオレの背中にも、これでもかといふほど伸ばしたくなる羽があるのだろう。この瞬間がたまらない。席にもたれ、精一杯の背伸びをする。

「が、」

背伸びをするオレの横腹に手刀突きが繰り出され、背伸びは不発に終わった。どこのバカだ。オレの背伸びを妨げたヤツは。

案の定、コウイチだつた。

「……お前しやまするなよ！ 背伸ひか不発に終わつたしやねーか

あーすまん。で、夏休みどうする?」
テストの結果を聞いてたんじやなかつたのかよ。

「特別何も無いけど」

「じゃ、じゃあさ、姫ヶ谷でも誘つて海でも行こりや?」

バカを言うな。ついこの前、水泳大会で恥を搔いたばかりなんだぞ？ それにあの時、泳いでオレを助けに来てくれた姫ヶ谷は自分が泳いだことさえ覚えてないんだ。それはまあ、もう一度見たい気持ちも分からんでもないがな。

「そうと決まつたら、どつかで晩飯でも食いながら作戦会議だな」「あ……そつだつた

「は？」

「そういえば今日、親父と外食行く約束してたんだつた」

「親父さんってあの警察官の？」

そう、それは今朝方、オレが学校へ行く私宅をしていた時のこと

。

「おいシゲル。期末テストって今日までだつたよな。調子はどうだ？」

親父はクローゼットの内扉についている鏡を見ながらネクタイを絞め尋ねた。

「まあ、ボチボチ」

「そうか……」

その時、なんとなく親父の様子がおかしい事に気が付いた。何か言いたげなのは分かるが、なんだか話を切り出しづらいようだ。それに何かは分からないが、妙な違和感が残る。

「あのな、シゲル

「なに？」

「あ、いや……」

オレはそんな親父を横目に、グラスに麦茶を注ぐと一気に飲み干した。朝食に取つたベーコンエッグのお皿を水で洗い流す。

「すまんなシゲル。毎朝同じような朝食ばかりで」

「いいよ。オレ結構、親父の作った質素な料理好きだし」

「そうか。……そうだよな、質素、質素なんだ」

どうしたのだろうか。今日の親父はいつもと違う気がする。親父はいつも何か言いづらいことがあると、鏡越しに話すクセがある。オレとは直接目を合わせようとはしない。

「よしシゲル、今日は久しぶりに外食でもするか。放課後はまつすぐ帰つて来いよ」

「ん？ ああ、わかつたよ。親父と外食行くのも久しぶりだな。でもなんでまた急に？」

「毎晩コンビニの弁当じゃお前も飽きるだろ？ 期末テスト終了祝いだ」

とまあこんな具合だ。だから今日せまいすぐ帰らなければならぬ。期末テスト終了を祝ってくれるのほりがたいが、できれば結果を聞かないでほしい所だ。

「てなワケで、今日はまっすぐ帰るよ」

「それならしゃーないな。じやあまた、いざれ遊びに行くか」

「ああ、わかったよ」

オレは席を立ち鞄を掲げると教室を見渡した。その時、姫ヶ谷の姿はすでに教室には無く、今日は珍しく早めに帰つたようだ。

しかしその帰り道のこと。

第15話 四人分

電信柱の影に隠れ何かをまじまじと観察している姫ヶ谷の後姿を見つけた。オレは彼女の目線の高さに合わせ、後ろから近づく。軽く脅かすつもりで彼女の耳元で囁いた。

「なに見てるの？」

「わつ！……学尾くん、ちょっと隠れて」

オレは姫ヶ谷に袖を引っ張られ電信柱の影に隠れる彼女の後ろに隠れた。で、何を見ていたのだろうか。彼女の視線の先には美容室があつた。

「……何してるかつて？」。何も聞かないオレに彼女は尋ねてきた。そりやそうだ。姫ヶ谷は今の自分の行動に正当な理由をつけたいらしい。傍から見るとなんとも怪しい状況だ。

「ストーキング？」

「聞こえが悪い言い方しないでよ！……コホン。あのね、最近ウ

チのお母さんの様子が変でね」

「お母さん？　じゃあ今美容室にいるのは姫ヶ谷のお母さん？」

「御名答」

「へえ！　初めて見る。どれどれ

「ちょ、ちょっと」

姫ヶ谷は再びオレの袖を引っ張った。しばらくして美容室の扉が開くと、一人の美しい女性が現れる。それが誰かを姫ヶ谷に確認する事なく彼女の母親だとわかった。

「そつくりだな。姫ヶ谷は完全に母親似だな。親父さんは見たことないけど

「なのかな。私もパパの顔は思い出せない

「思い出せない？」

オレは彼女のその言葉の意味を察した。母親のことを「お母さん」と呼び、父親のことを「パパ」と呼ぶ姫ヶ谷コトハのその深層心理。

それは彼女と彼女の父親との時間がそのまま止まっていることを意味する。恐らく彼女自身、無意識のうちに使い分けていることに気が付いていないようだ。

「学尾くん、なにしてるの？ 追いかけるわよ」

「え？ ああ悪い。今日はもう帰らないと」

「そう……よね」

オレは姫ヶ谷を残しその場を後にした。

オレは親父に言われた通り、駅前のレストランに集合した。

「ここで……いいんだよな」

久しぶりの外食なのはわかるが、この高級感はいったい……。つていうかホントにここで大丈夫なのか？ オレが店内に入るとウヒイトレスがやつて来る。

「いらっしゃいませ。ご予約はされていますか？」

「はい、学尾で予約していると思うんですけど……」

「学尾様ですね。こちらにご案内します」

どうやらここで間違いないらしい。と思ったが席に案内されて間違いとも思った。オレが案内されたテーブルにはどういう訳か四人分の席が用意されていた。

「あの……予約は二名だったと思うんですけど……」

「一名ですか？ こちらの席のご予約をいただいたのは学尾ノボル様ですが」

間違いなく親父の名前だ。しかし四人とはどういうことだろうか。疑問を抱きながらもオレは席に着いた。落ち着かない。辺りを見渡しても制服を着た学生なんてオレ以外にはいない。場違いではないだろうか。そうしているうちに親父が到着する。

「すまん。遅くなつた」。そう言って隣の席へと座つた。オレはさつそく問いただした。

「……なんで四人分なんだ？」

予約人数のミスかとも考えたが、親父が隣に座つたことでその可能性も無くなつた。オレの目の前には空席が一つ。明らかにあと二人、誰かが来る事を説明している。警察の仕事仲間だろうか。だとしたらオレを誘うのはどうかとも思うが。

「実はなシゲル……前々から言おうとは思つてたんだが」

どうした親父。そんなにあらたまつて。視線を向けるその先、親父の後方からもう一人別の女性の声が聞こえてきた。

「ゴメンなさいね。ノボルさん、遅くなつちやつて

ノボルさん？」

「ああ！ クレハさん。いえいえ全然、平氣ですよ」

クレハさん？ 親父の後ろには年の頃30～40歳ほどの、美しい女性が立つっていた。しかしながらどうか、どこかで見たことあるような。さりにその後ろからもう一人、もっと若い女性の声が聞こえてきた。

「お母さん、何なの急に……」

親父は一人を前に紹介を始めた。

「この人は姫ヶ谷クレハさん。俺の再婚相手だ」

……え――つ――！――！――！

……

姫ヶ谷クレハの後ろからひょっこりと顔をだし、目を丸くして驚いているのは言つまでもなく、同じクラスのクラス委員、姫ヶ谷コトハだつた。

オレたちはきっと心の声を揃えたに違いない。

『姫ヶ谷!』

『学尾くん!?』

状況が掴めない。親父の指示通り駅前レストランに来たのはいいが、なぜ目の前に姫ヶ谷コトハが現れるのだ？ まさか期末テスト終了祝いと一緒にやりましょうなんて、そんなバカな話はないだろう。見たところ、親父とこの姫ヶ谷クレハなる人物は、どうやら知り合いらしい。親父はすでに状況の説明していたのだが、オレは気が動転していて物事を冷静に判断する頭を持ち合わせてはいなかつた。

「で……何？」

思わず口をついて出たオレの言葉だ。

「だから、俺の再婚相手の姫ヶ谷クレハさん。新しいお前の母さんだ。あ、こいつはウチの一人息子の長男坊で……」

ちょ、ちょっと待つてくれ。話が飲み込めない。喉に詰まつてはきだしそうだ。混乱するオレを前にクレハは話を進めてきた。

「よろしくね。シゲルくんだけ？ お父さんに似ていい男じゃない。ねえ」

「やめてくださいよ、シゲルに乗り換えなんて」

二人は見つめあつてケラケラ笑つていた。ああ、もう勝手にやつてくれ。いやしかしそうもない。行き場を無くしたオレの視線は無意識にコトハを捉えた。刹那の間で目をそらし、もう一度見る。いわば一度見状態。コトハもその賢い頭で状況を整理しているのだ

ろうが、その瞳が泳いでいるのがよく分かった。きっと彼女も何一つ知らされてなかつたに違いない。クレハはコトハの肩に両手を置くと話を続けた。

「あつ、この子はウチの一人娘のコトハっていうの。多分シゲルくんと同じ年くらいだと思つんだけど……ほら、学尾くんたちに『挨拶して』

向かい合つオレとコトハ。しかし何一つ言葉を交わさない。正直、かける言葉が見つからないというべきか。親父とクレハはそんなオレたちを見てなんだか気を使つてているのがわかつた。

「ど、とりあえず席に着きましょうか、ねえコトハ」

姫ヶ谷親子はテーブルの向かい側に周り込み席に着いた。その際、コトハはオレから一度も視線を反らさなかつた。

「実は、コトハちゃんとシゲルには、いつか顔合わせしてもらわなきやいけないと思つてて、それでこんな形で会つことになつたんだけど。これからは家族4人で……」

- - 家族4人。それはこれから学尾家に訪れる新生活のスタートを意味していた。

今まで男一人で生活してきたこの空間に、一人の女性がやつて来る。ただそれだけならまだいい。しかし親父の再婚相手、姫ヶ谷クレハの娘は同じ高校の同じクラスのクラス委員、姫ヶ谷コトハだ。こうなつてしまつてはもう何が何だかという感じだ。これでは否が応でもコトハのプライベートに触れるこにもなるだろつ。コウイチに頼まれていた『姫ヶ谷コトハの考察』もこれからは休む暇もなくつけなければいけないのだろうか。いや、そんなことをしたら次第とオレの存在まで浮き彫りになる。家族とはいえ、オレとコトハが一つ屋根の下で一緒に暮らしていることをコウイチに知られたらどうなる？絶対に秘密にしておかねば。今後の生活が思いやられる。オレ達が夏休みの間にと、コトハとクレハは学尾家に引っ越しして

きた。

「こんなにちは

学尾家には姫ヶ谷家から運ばれた必要最低限の荷物がダンボールに詰め込まれ、通路をふさいでいた。

「シゲル。コトハちゃんの荷物運ぶの手伝つてやれ

「あ、ああ、でも部屋は？」

「シゲルの部屋の横に空き部屋があつたるう？」

あれは空き部屋というより物置部屋へと化していたように記憶していたが、いつやつたのかキレイむつぱり片付いていた。

コトハは玄関に立ち尽くし、辺りを見渡していた。彼女がここに来るのは、あの時のお見舞い以来、今日で二回目になる。駅前レストランでの対面から数日後、ここにきてオレたちは初めてお互いの沈黙を破つた。

「あ、あのさ……部屋は一階だから荷物運ぶよ？」

「え、ああ……うん」

オレはダンボールを抱え、玄関横にある階段を上る。コトハも遅れてあとから付いて来た。階段を上り終えるとすぐ右手にオレの部屋がある。そこから真っ直ぐ進んだ突き当たりには、かつての物置部屋。そしてこれからはコトハの部屋になる場所だ。

今まで締め切っていたこの部屋は空気の入れ替えのために、扉は開放し、窓も全開にしておいた。部屋に入ると、吹き抜ける風が身を包んだ。オレは荷物を抱えたまま振り向く。

「つてなワケで、こここの部屋自由に使つていいから」

部屋を抜ける風がコトハの黒髪を撫でている。夏の風が生暖かく、はためくカーテンの音が聞こえていた。

「やつぱりどう考へてもまずいでしょ？」

荷物を部屋へと運び入れるオレに、コトハは語りかけてきた。

「だよな。親父も姫ヶ谷のお母さんも、オレと姫……コトハが初対面だと思つてるぞきっと」

「私、名字が変わるわけ？ 学尾コトハ？」

問題大有りだな。同じ学校つてなだけならまだしも、同じクラスときたもんだ。コトハの名字が『姫ヶ谷』から『学尾』に変わりましたなんてなつたら、オレの立場もどうなることやら。周囲の目も気になる。

「なんかヤダ。学尾くんと同じ名字だなんて」

「お……オレだつて『メンだよー』。コトハに対し、オレもむきになつた。

こればっかりは親父に相談しなければならないだろ？ まずはオレとコトハが同じ学校の同じクラスであることを理解してもらおう。

姫ヶ谷親子はキッチンに立ち晩御飯を作っていた。かつてあまり使われていなかつた台所も、ようやくそのお役目が果たせるというのだろう。しかし親子とはこつも似てゐるものかと思いながら、オレは一人の後ろ姿を見ていた。容姿が似てゐるとは言つてもやはり年の差は感じるのだが、この親あつてこの子ありといふか、容姿よりも雰囲氣が似てゐる。その夜は学尾家で初めて、家族四人で食卓を囲んだ。テーブルの上には『最初の晩餐』にふさわしく、何品もの手料理が並んでゐる。驚いたのは母親であるクレハよりも、コトハの方が指揮をとつて夕食を作つていた事だ。これには正直驚いた。

「親父！ ……手料理だよ、手料理」

「そりだなシゲル！ これからは『ンビニ弁当とはおやうばだな』オレと親父はしみじみと泣き出した。次々と運ばれる品々を前に今度は腹の虫が鳴きはじめる。クレハとコトハはエプロンを外し、食卓についた。

第18話 見た目はこうの元

「見た目はよし……しかし食べ物はやはり味。コトハ同様、料理も見た目だけじゃなればいいのだが」

「私同様だつて？」

「え？ やつぱりお前、オレの心読めるのかー？」

「今口に出して言つてたわよ。どうやら今日の晩御飯はいらないと見える」

そう言つながら、コトハはオレの分のお皿を引き始めた。

「い、いります食べます、ごめんなさい」

オレとコトハとのそんなやり取りを見てか、親父とクレハは顔を見合わせると笑い出した。

「いやいや、仲が良さうで安心したよ」

「そうよ、最初会つた時はお互い、一言も喋らないんだもん。気を使つて損したわ。でも、急に仲良くなるものなのね」

今度はオレとコトハが顔を見合せた。これをどう見間違えたら仲いいと判断できるのか謎だが、親父とクレハには話しておかなければならぬことがある。

「そのことなんですけど、クレハさん。オレとコトハは……」

「これからはクレハさんじゃなくて、お母さんでしょ？ ママでもいいわよ」

「はい……じゃなくて、オレとコトハは実はもう知り合つたんですね」

「…………えつ？」

親父とクレハは予想通りの反応を示した。再び顔を見合させていが、今度はキョトンとした面持ちだった。コトハはオレの会話を引き継いだ。

「そうなんです。私と学尾く……コホン、シゲルくんとは同じクラスなんです。だから初対面でもなかつたし、どちらかといつと同じ

クラス委員だから接点もあつて

親父とクレハは声を揃えて驚いた。

「えーーーっ！ じゃあ、二人とも笠枝高校の一年C組？」

オレとコトハは揃つてうなずいた。親父はしばらく考え込むと、何かを思い出したかのように語りだした。

「……そいえば前にシゲルが言つてたな。六クラス代表ジャンケンで凄まじい勝ち方をした、頭も見た目もいいけど、性格が残念な子つていうのは」

「そう、それ！」。オレは箸で親父を指した。

「それ！ ……ってシゲルくん？ 性格が残念なつてどんな話してるのよ」

コトハは再びお皿を取り上げた。

「ちょっと、返せよ！ そういう所が残念なんだ。もつと女の子らしくしてれば可愛げもあるものの」

「うるさいわね！」

それを見ていたクレハが、今度は何かを思い出したかのように語りだす。

「あつ、シゲルくんつてクラス委員なら、もしかしてコトハに告白した子？」

「そう、それ！」。コトハは箸でクレハを指した。

「それ！ ……って、その真相は違うだろ！」

オレとコトハはいがみ合つていた。しかし、今日の晩飯はまぎれもなくコトハが作った物だ。早くメシにもあり付きたいし、ここはひとつオレが折れて大人の対応を見せてやるか。

「ああもう、オレが悪かったよ」。だからメシを早く返してくれ。

「解ればよろしい

なんだか偉そうなコトハにイラッとするも、オレは大人の対応を貫いた。

「あら、シゲルくんつて案外大人なのね」。クレハはその様子を見て微笑むように言った。

「仕方ないですよ。これから兄になる者として当然です」

「ちょっと待った——！」コトハは持っていた箸をテーブルに叩きつけると立ち上がって言った。オレは予想外のコトハの反応に驚きを隠せなかつた。

「兄ですって？……弟の間違えでしょ。私が姉で、あなたは弟。

……あなた、何月生まれよ！？」

「何月つて、5月8日だけど……」

「……うつ！」

コトハは無言のまま着席する。わずかに続いた沈黙を破つたのはクレハだつた。

「あらコトハ。自滅したわね」

「ま、まあ、ご飯たべようか。せっかくの『駆走が冷めてしまつ』。親父も笑顔を努めていた。

「よろしく妹

「誰が妹よ！」

「いただきまーす……ん！？」

とまあ、こんな感じで波乱の幕開けとなつた新生活。結局その日の晩餐も、コトハが砂糖と塩を間違えたおかげでとても食べられたものじゃなく、出前を頼むことになつた。見た目はいいのに味が残念であるで……以下略。

ちなみに途中でコトハの名字が変わるのは何かとまずいだらうといつ学校側の配慮もあり、彼女はそのまま『姫ヶ谷』を名乗ることになつた。

さて、我が笠枝高校二年生は毎年夏休み中に修学旅行へ行く事になつてゐる。行き先は京都・奈良の一泊三日だ。そしてそんなオレは今、すごく焦つていた。

「コトハの奴、家を出る時も別々だもんな。行き先は同じなのに」学尾家に姫ヶ谷親子を迎えて数週間が経過していた。しかしその事は誰にも話してはいない。もちろんコウイチにも。そんな秘密と旅行鞄を抱えたまま、オレは呼吸を整え、新幹線の乗車チケットを握り締めていた。どうやらコトハは、オレと一緒に住んでいることを他人には知られたくないらしく、コトハが先に家を出てから、その10分後にオレが家を出ることになつっていた。そのくせコトハが時間ギリギリに家を出発したために、たつた今オレは走らされている。

もちろんオレも、一緒に暮らしていることなど他人には知られたくないのだが、登校時間をずらすのなら、後に家を出る者ることを考えてほしいものだ。

「遅いぞ学尾！ それでもクラス委員か？」

「はい！ すみません！」

担任の先生に急かされるも、なんとかギリギリで乗車する。間もなく列車は動き出した。車内の通路を歩きつつ、学校から渡された指定席の番号を確認する。馴染みの顔がそれぞれの席に着いて、なにやら楽しそうに話しをしていた。

「えっと、この組の指定席は6号車だからオレの席は……あつた」オレは座席上にある荷物置き場へと荷物を押し込む。その視界の端で、一人の男が立ち上がりこつちに向かつてくる姿を確認した。「おいシゲル、相変わらずギリギリだな」。振り向くとそこには、コウイチが立つていた。

「まあな」

「……ところでアレ、忘れてないだろうな？」

「コウイチはオレの肩に手を置き、遠くを眺めている。その視線の先には、5号車から6号車へと溢れたB組が数名着席していた。オレはコウイチに視線を戻す。

「当然だろ？ オレたちにとつてのメインイベントだからな」

オレはそう言って、昨晩から制服のポケットに忍ばせていたトランプの箱をコウイチへと手渡した。

「だな」

「あ、一円玉は両替できたか？」

「ああ、このとおり」

「コウイチはビニール袋を手の前に掲げる。中には大量の一円硬貨が入っていた。

「これで担任の田はじまかせる。ゲームスタートは今からキッチリ一時間半後だ」

いつからか我が笠枝高校では、男子の中でトランプを使ったギャンブルが流行っていた。最初は単に遊びを目的としたゲームだが、次第とお金で賭けはじめ、十円から百円、千円と掛け金が上がり、オレたち高校生のお財布事情では小さなお金の動きでさえ、今後の生活に大きく影響した。そして今日もまた現地へと向かう列車の中、お金に飢えた男どもが集い、ギャンブルをすることになつている。オレもまた、今日は一人のギャンブラーだ。今回準備できた軍資金、つまり修学旅行に持つていける「お」ずかいの金額は一人当たり3万円と、日常の高校生活の比ではない。そしてなぜか毎年、この日だけはゲームの相手が他のクラスの者達になる。今年の場合は5号車から6号車に溢れたB組数名が相手となり、同じクラスのC組の連中とは手を組んでゲームに挑む。これはおそらく仲間意識、同士の間で親密さが生まれるという心理からだらう。前にあつたクラスマッチも然り、野球、サッカーは地元同士でチームを作るという心理、オリンピックにいたつては、母国を応援するものがそのほとんどだらう。そして今日のギャンブルはいわば、組を代表

して行われる派閥争い。オレも今日の勝負にはそのほとんどを投資している。今日はこの一年で最も大金が動くビッグゲームとなりうるだろう。

かねてより我が笠枝高校の修学旅行では、新幹線の中でトランプを使ったギャンブルをするという伝統があった。しかし、二年前の先輩達が現金を賭けている所を担任の先生に見つかり、厳しい処分を受けたこともあり、今では先生にバレないように実際の金額の1/100レート、つまり一円玉=百円をチップとして机の上に置きギャンブルをしている。そう、一見するとただの遊びに見えるのだが、実際はその百倍ものお金が動いていくことになる。コウイチが準備した大量の一円玉の理由はそこにあった。ゲームで取得したチップは後で精算し百倍となる。

オレはゲームスタートまでの時間で、なんとか心を落ち着かせようとして指定席に腰掛けた。

「ずいぶんと遅かつたわね。学尾くん」

オレが座る席のすぐ横、窓際の席で肘を付くコトハが言った。なるほど、学校ではあくまで他人行儀に『学尾くん』で通すようだ。

「誰のせいだよ、誰の」

クラス委員のオレとコトハの席は隣同士、クラスの前後が見渡せる席を担任の先生が手配していた。普通なら出席番号順なのだが、クラス委員のオレ達は点呼が取りやすいようにとの事だ。もつとも、遅ってきたオレが来た時点で、ようやく全員が揃つたようだが。

コトハは視線を下ろすと、再び手元の小説を読み始めた。これもコトハと一緒に暮らしあげて分かつたことだが、彼女は本が好きらしく、家でもだいたい本を読んでいる。いつかコトハが本を読んでいる最中に、何度も呼びかけたことがあったが、返事は無かつた。コトハはマイワールドに入ってしまうと聞く耳を持たない。まあ、これでオレもゲームスタートまでの時間をゆっくり過ごせるというもんだ。

第20話 ババ抜き

オレはトントンと肩を叩かれて目を覚ました。いつのまにか眠ってしまっていたようだ。寝ぼけ眼で振り向くと、コトハがこちらを凝視していた。ああ、そうだ。今は修学旅行へ行く新幹線の中で、朝走ってきた疲れもあって眠ってしまったのか。腕時計で時間を確かめると、ゲームスタートまであと四十分あった。オレはコトハに尋ねる。

「えっと、なに？」

「暇

「……なんだって？」

「暇！」

お前は駄々っ子か。という突っ込みが喉もとまで出掛かっていたが、何とかそのまま飲み込んだ。

「暇つておまえ、本はどうした？」

「全部読んじやつた」

「ああ、そうか。だったらクラスの女友達とガールズトークでも楽しんできたらどうだ？」

「……」

そういえば、ウチのクラスでも女子はよくグループを作つており、その派閥はオレの知る限り大きく三つに分かれている。一つは高校生でありながら厚化粧バツチリのギャル集団。校則は守らうとせず、何かと反抗的な態度をとる。もちろん、クラスマッチでも非協力的だったグループだ。もう一つは、そんなギャル集団とは対照的なおとなしめの優等生集団。成績、ルックスともにレベルは高いほうだ

が、内向的でこれまた非積極的というか。最後の一つは活発な体育会系女子集団。ただそのほとんどが陸上部で水泳大会は畠違いとなる。

今思えば、ウチクラスの女子の水泳レベルが高いわけないだろう！ という時間差突つ込みが、喉もとまで出掛けっていたが、何とかそのまま飲み込んだ。問題なのはそこじゃない。

「それでコトハは、どこに属するんだ？」

「え？ ……私は」

質問して気が付いた。姫ヶ谷コトハはどこにも属していない。脳裏に浮かんだのは、教室でいつも一人で本を読んでいる姫ヶ谷コトハの姿だった。オレは話を変えるべく、とっさに提案した。

「えっと、じゃあ、トランプでもするか！」

「あ、うん！ する！」

その時のコトハの笑顔はなぜか、これまで見た中では最高の表情だったように思えた。

「あ、でもオレ、トランプ持っていないや。と書いつつはコウイチに貸してくる。

「いいよ。私、持ってるから」

コトハはそう言ってトランプの包装紙を開け始めた。

「新品？」

「うん、そうだよ。私一度こんなふうにトランプしてみたかった

の」

「コトハはそう言しながら、トランプを切り始めた。その手つきはなんともおぼつかない。

「トランプしたかったって、やったことないのか？」

「ルールぐらい知ってるわよ」

コトハは切ったトランプを、オレの手元と自分の手元へと交互に配つていく。

「……で、なんで一人でババ抜きなんだ？」

オレは大量の手札を前に言った。

「いいじゃない。こうやって揃ったカードを場に捨てていけば、手札は減るでしょう？」

配られたカードは高確率でペアが揃い、はじめる前から手札は半分以下となつた。なんだこの消化試合は。これはゲームというよりも作業だな。そしてオレの手元にジョーカーがないことから、コトハの手元にあることがわかる。これではババ抜きの面白みもあつたもんじやない。

「やっぱり、最低でも三人以上は必要だろう」

オレは辺りを見渡すが、該当者が見当たらなかつた。コウイチを誘えば来るだろうが、オレとコトハが一緒にいる時は、あまり近くに置きたくない存在だ。それに、これから大勝負に出るというのにこんな馬鹿げたゲームで感覚を狂わせるわけにはいかない。オレはため息を吐くようにその作業に戻る。これでも、ギャンブルまでの時間潰しにはなるか。再びコトハのカードに手をかけようとした時。

「あ、コトちゃんめつけ！」

そこにはウチの高校の制服を身にまとい、髪を左右で結んだ女子生徒が立っていた。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n0021w/>

姫ヶ谷コトハの心理学方程式

2011年12月21日11時52分発行